

E. M. フォースター「機械が止まる」に見る 人間社会の理想像

松林和佳子

〈序〉

英国ヴィクトリア朝は科学が目覚ましい発展を遂げた時代であったが、ヴィクトリア朝後期になると人々は次第に急激な進歩に対して否定的な感情を抱くようになり、世紀転換期には科学に対する懐疑や恐怖が蔓延するようになった¹。このような風潮は当時の文学にも多大な影響を与え、19世紀末から20世紀初頭にかけて、文明の発達に対する不安を反映した空想科学小説やディストピア小説が多く登場するようになる。1909年に発表された E. M. Forster の短編小説 “The Machine Stops” も、そうした作品群の1つだと言えるだろう。機械文明が進化の果てに崩壊していく様を描いたこの作品は、Aldous Huxley の *Brave New World* (1932)、George Orwell の *Nineteen Eighty-Four* (1949) など、20世紀に登場するディストピア小説群の先駆であるとも言われている (Hillegas 82)。

この作品が執筆された頃、フォースターが科学の発展に対してネガティブな感情を抱いていたことは、彼が重航空機について書いている記事から容易に想像できる²。1908年1月、1分半の飛行成功を報じたニュースに対して、フォースターが示している反応は好意的なものではなく、むしろ “Science, instead of freeing man . . . is enslaving him to machines.” と、人間が機械の僕になることへの懸念を示すものであった。フォースターの書いた唯一のサイエンス・フィクションである「機械が止まる」は、作者の機械文明批判が表現された作品として、人間関係の崩壊と個人の孤立、世界の均質化、従来の宗教の崩壊と新たな宗教（機械への崇拜）の誕生、人間と道具の主従関係の

逆転など、ディストピア小説や空想科学小説特有の社会的テーマを中心に論じられる事が多い。しかし、この作品を当時の時代精神を反映した小説の1つとしてではなく、フォースターという作家の作品の1つとして、彼の他の短編小説や長編小説とともに並べてみると、ジャンルの特異性だけでなく、創作の方向性のターニング・ポイントを示すという意味でも異彩を放っていることに気付かされる。この作品はテーマやジャンルの点で時代背景との関わりに興味を引きつけるため、作者自身の創作の系譜との関連性は見落とされる傾向にあったのではないだろうか。本稿では、「機械が止まる」に描かれる未来社会を、フォースターが描くファンタジー世界の1つと捉え、他作品をも視野に入れて包括的に分析したい。具体的には、初期の幻想的な短編小説、またこの作品と同時期に執筆が進められていた *Howards End* (1910) やそのすぐ後に書かれたと推定されている同性愛の物語 *Maurice* との比較を通して、「機械が止まる」におけるファンタジー的要素の特徴を考察し、現実に対するフォースターの認識がこの時期にどのように変化しているかを明らかにしたい。

〈1〉

フォースターが「機械が止まる」を執筆したと考えられる1908年は、作者にとってどのような時期だったのだろうか。1月に飛行機のニュースが報じられたことは既に述べたが、同年の6月にもフォースターにとって画期的な出来事があった。それは Walt Whitman の詩集 *Leaves of Grass* との出会いであり、この出会いは彼の作家としての人生に長きにわたって大きな影響を及ぼすことになる。ホイットマンの詩に表現された「結合 (connect)」というテーマに感銘を受けたフォースターは、その後まもなく「新しい小説の構想」を思いつき、この構想は2年後に『ハワーズ・エンド』として実を結ぶことになる³。

『ハワーズ・エンド』は、「今まで作者が追求してきたテーマを現実の困難に直面させることによってさらに掘り下げた」、「大人の責任にあふれた小

説」(Trilling 114-115)だと称賛している Lionel Trilling をはじめ、多くの批評家から高く評価された。その理由は、『ハワーズ・エンド』が当時の英国現代社会の枠組みの中で、様々な社会問題の根源となる価値観の対立を炙り出し、その融和の可能性を追求している点にあるだろう。『ハワーズ・エンド』の成功によって、フォースターは作家として確固たる地位を確立する。

また、残されたフォースターの日記や手紙から、この『ハワーズ・エンド』出版後の数年間、フォースターが『モーリス』の執筆に従事していた事が明らかになっている。同性愛が法によって禁じられていた当時の社会下において、同性愛に関する描写が克明なこの作品を、彼はごく一部の友人達を除いて、公開するつもりはなかったようである。しかしそれでも、1910年代前半の時点ですでにフォースターが同性愛をテーマにした小説を書きたいという強い思いを抱いており、それを実行に移していたという事実は注目に値する。

このように、「機械が止まる」が執筆された1908年以降の数年間は、作家フォースターにとって重要な時期であったと思われる。そのため、それぞれジャンルは異なるが、『ハワーズ・エンド』や『モーリス』と「機械が止まる」を比較検討することは、新しい展望が期待できるという意味で興味深い。実際、近年には「機械が止まる」と『ハワーズ・エンド』、『モーリス』との関連性を指摘する批評も見られるようになってきた。例えば、2010年の Ralph Pordzik の議論では、「機械が止まる」に描かれる地下世界を「閉ざされた空間」と捉え、その中に隠蔽された同性愛のテーマに焦点が当てられている。また2008年には Kelly Elizabeth Sultzbach が、「機械が止まる」『ハワーズ・エンド』『モーリス』に見られる「田園 (pastoral)」の表象に注目し、この3作品が「自然への回帰という欲望とその失敗」を描くことによって現代社会に対する批判を表明しているという点で共通していると論じている。彼らの議論は、ジェンダーや自然などそれぞれテーマは異なるが、『ハワーズ・エンド』や『モーリス』といった前後の作品と「機械が止まる」との繋がりを前景化している。

「機械が止まる」は一種のファンタジーであるという点で、初期の短編小

説群と同じカテゴリーに属する作品として論じられることが多い。しかし、この作品に描かれている架空の世界は、初期の物語に登場する幻想の世界とは全く異なっている。むしろ、執筆の時期が近い『ハワーズ・エンド』や『モーリス』との繋がりを視野に入れることによって、フォースターが「機械が止まる」で用いているファンタジー的要素の特徴がより明確になってくるように思われる。次の節では「機械が止まる」における未来社会という幻想世界の描写を具体的に分析し、まずは初期の短編小説における幻想世界との違いについて考察したい。

〈2〉

「機械が止まる」に描かれる架空の世界は、機械に支配され、統制されている未来の世界である。衣・食といった生活上の基本的な行為だけでなく、音楽や文学といった芸術を楽しむ娯楽、人とのコミュニケーションに至るまで、すべては機械を通じて行われる。このような生活は、機能的で便利な反面、人間の自主性や身体能力を奪ってしまう。例えば、主人公 Vashti が暮らす部屋には、家具や装飾品、食べ物や服、本などは一切存在せず、設置されているのはそれら呼び出すボタンとスイッチだけである (112)。いつでもすぐに欲しい物を目の前に呼び出せるシステムがあるので、人間は欲しい物を手に入れるために外に出掛ける必要がない。ヴァシュティは、このような生活に満足し、文明の発展に対して次のような見解を示している。

And of course she had studied the civilization that had immediately preceded her own – the civilization that had mistaken the functions of the system, and had used it for bringing people to things, instead of for bringing things to people. Those funny old days, when men went for change of air instead of changing the air in their rooms! (115)

この世界では、文明の利器は人間を対象物に向かって運ぶ事に使われるのではなく、対象物を人間のところまで動かすことに使われる。そして、ヴァ

シュティにとっては、対象物に向かって人間が移動するために文明の力を使うというのは間違ったやり方であり、そういった事を実際に行っていた時代は、“funny old days”でしかない。つまり、すべてのものが身体を動かすことなく与えられるために、何かを求めて自主的に動き、住居から出るという発想が完全に失われているのである。

必要に応じて何でも与えられるという環境は、人間から自分で考える力も奪っていく。物語の半ばで、ヴァシュティは、直接会いたいという息子の要求に応じるために飛行船で旅することを余儀なくされるが、その時1人の乗客が乗降タラップに本を落としてしまう。しかし、本を落とした乗客は、落とした物は常に機械が自分のもとへ戻してくれるという環境に慣れているため、そのような装置がない場所で物を落とした時にも、自分で拾い上げるという発想が湧いてこない(118)。このエピソードは、人間が目前の様子を見ることはできても、その状況を自分で判断して行動を起こすことが、もはやできなくなっていることを証明している。

さらに、動くことを必要としなくなった生活環境が、人間の肉体にも影響を与えることは想像に難くない。“a woman, about five feet high, with a face as white as a fungus” (109) というヴァシュティの容姿は、動かない生活を長く続けたため、虚弱化した身体を想起させる。一方、機械文明に反対の立場をとる息子 Kuno は、ヴァシュティとは対照的に、“a certain physical strength”を持つ人物として描かれている。しかし、彼の身体の強さは、“By these days it was a demerit to be muscular.” (124) という一文に示されるように、ここではマイナス要素とみなされる。人間の謀反を警戒する機械は、ある程度の身体能力を持つ人間を恐れ、出生時に身体検査を行い、遅しい身体に成長する可能性がある者は抹殺してしまう。機会の支配下にある世界においては、人間の身体能力の価値は認められないばかりか、排除すべきものになってしまうのだ。そのような社会では、大抵の人間はヴァシュティのような容姿をしていると考えてもよいだろう。機械に依存し、支配され、便利さと引き換えに人間が自主性を失っていけば、思考の面でも身体の面でも

個々の違いは存在しなくなってしまうのではないだろうか。機械の統制は、同じようなものを使って同じような生活を営み、同じような外見をした人間ばかりの画一的な社会へと導いていくのだ。

物語の冒頭で、ヴァシュティが暮らす部屋が“a small room, hexagonal in shape like the cell of a bee (109).”と描写されていることは注目に値する。というのも、Arthur O. Lewis が指摘しているように、20世紀のSF小説やディストピア小説では、あまりにも整然と過剰に組織化された人間社会の象徴として“hive”が使われることが多いからだ (Lewis 5)。しかし、Marcia Bundy Seabury が言及しているように、古代ギリシアでは「蜂」や「蜂の巣」は「勤勉」「服従」「富」など人間社会の理想を表すシンボルであった。「蜂の巣」の歴史を遡ると、人間社会の比喩としてのイメージは、時代の流れと共にポジティブなものからネガティブな方向へと推移していったことが分かる。またシーベリーは、自然の中に生息する生物が構築する「巣」と人間によって整備される人工的な「組織」には根本的な相違点が存在することにも注目している。例えば、蜂の本能によって作り出される均整のとれた「巣」は、効率よく高い生産性を維持することができるが、その機能を人間社会に当てはめると、効率的な集団というプラスのイメージと共に、無個性な個々人の集合体という、何か恐怖を感じさせるようなマイナスのイメージも付与される。ポジティブとネガティブ両方の要素を併せ持つ「蜂の巣」の比喩を使って、フォスターは機械の統制によって近代化した人間社会の特徴を巧みに描き出しているとシーベリーは論じている (Seabury 68)。

シーベリーの議論から明らかになるのは、ポジティブ・イメージとネガティブ・イメージを分かち境界の曖昧さである。「機械が止まる」に描かれている機械社会は、本来ならば人間の知恵と技術を駆使して利便性を極めた理想の生活環境であるはずだ。しかし、物語の冒頭から強調されているのは機械社会における非人間性や無機質さであり、機械によって整備された世界は人間の社会としては欠陥があると訴える。どんなに理想の社会を追求しても、「蜂の巣」のイメージのように、ポジティブとネガティブは反転してし

もう可能性がある。機械の支配に満足しているヴァシュティは、“All the fear and the superstition that existed once have been destroyed by the Machine.” (124) と述べ、現状は完璧だと考えているが、物語は「完璧な人間社会」を目指すことの落とし穴を示唆していると言えるだろう。

「機械が止まる」に描かれる架空の世界を、初期の幻想的な短編小説における幻想世界、例えば“The Story of a Panic”に登場する神秘の世界と比較してみると、その違いは明らかである。「パニック」で仄めかされる牧神パンの世界は、人間の知性を超える荒々しい自然に根差した世界であり、機械に統制された人工的な世界とは正反対である。「パニック」ではパンが象徴する幻想世界は人間を現実世界の束縛から解放する別世界として描かれていたが、「機械が止まる」の未来社会は、技術の発展によって理想的な状態に整えられた世界が徐々に人間の自由を奪っていく様子を浮き彫りにしている。一方で、機械社会からの脱出を試みるクーノは、人間が「地球の表面」の上で自らの意思によって身体を動かしていた「過去の生活」の中に解放の道を見出す。彼が目指す人間世界のあるべき姿とは、取りも直さず我々が暮らしている日常世界そのものである。この作品では、我々にとっての「現実」や「日常」が、「パニック」など初期のファンタジー作品における超自然的な幻想世界と同様の役割を担っていると言えるだろう。我々が当たり前だと思っている日々の営みは、ヴァシュティやクーノが暮らす機械世界では、もはや非現実的な「ファンタジー」なのである。現実には閉塞感を感じた時、我々が現実とは次元の異なる世界に憧れ、非日常を求めるのと同様に、クーノもまた彼にとっての理想である「過去の生活」に思いを馳せ、それを復活させようとする。次節では機械社会に対するクーノの反逆に焦点を当て、「人間が尺度 (“Man is the measure”）」という彼の主張を中心に、機械社会と「過去の生活」の比較を通して、人間社会のあるべき姿がどのように描かれているかを詳しく検討していく。

〈3〉

機械が支配する生活に依存し、『機械の書』という操作マニュアルを聖書のように崇拜するヴァシュティとは違い、息子のクーノは過去の生活に憧れ、人間がかつて持っていた身体能力を回復させようと試みる。外見も価値観も対照的な彼らの見解の相違が最も顕著であるのは、直接体験に対する反応である。ヴァシュティは地球の反対側に住んでいる自分の息子クーノと会話をする際にテレビ電話を使う。この世界のテレビ電話は、“general idea”だけを拾い上げて相手に伝えるため、“nuances of expression”を正確に映し出すことは出来ないが、ヴァシュティはその欠陥を全く不満に感じていない。彼女は、人間同士の意思伝達という目的を達成するためには、機械によって伝達可能な“general idea”だけで十分であり、“nuances of expression”を生み出す“the imponderable bloom”は、必要がないと考えているからだ。むしろ彼女にとっては、機械によって伝えられる限られた情報量は、コミュニケーションをする上で、無駄なものが排除された好ましい状態なのである。そのためヴァシュティは、クーノに「機械を通さずに直接会う」ことを要求されると、“But I can see you! . . . What more do you want?” (110) と、その必要性が理解できず、戸惑うことになる。

一方、クーノはヴァシュティと違って、機械によって伝えられる“something like you”では満足できない。彼は、コミュニケーションにおいて、機械が伝える相手の限られた情報、つまり“general idea”だけではなく、何の媒介もなしに相手と対面し、もっと多くの情報を得る必要があると考える。彼にとって、表情の変化・声の調子・沈黙など、言葉以外の情報から相手の感情を捉えることは、コミュニケーションにおける不可欠な要素なのだ。クーノの見解は、機械によるコミュニケーションの欠陥を明示しているだけでなく、機械が伝達できない言葉以外の情報を軽視するヴァシュティのような考え方が、相手の発する重要なメッセージを見逃すという点で、危険であることも示唆している。

クーノにどうしても直接会って話したい事があるから来て欲しいと懇願さ

れ、ついにヴァシュティは、飛行船を使って地球の反対側に住むクーノのもとを訪れることを決心する。旅の方法や経路については熟知しているにもかかわらず、ヴァシュティはこの旅に気が進まず、不安にとらわれていた。ヴァシュティを脅かすのは、旅そのものではなく、「直接体験の恐怖」(115)である。この恐怖は、ヴァシュティが実際に飛行船に乗ろうとする時、より具体的に描かる。

Yet as Vashti saw the vast flank of the ship, stained with exposure to the outer air, her horror of direct experience returned. It was not quite like the air-ship in the cinematophote. For one thing it smelt – not strongly or unpleasantly, but it did smell, and with her eyes shut she should have known that a new thing was close to her. (117)

実際に目にする飛行船は、映写スクリーンでは伝えられない“smell”が存在することによって、ヴァシュティが認識していた飛行船とは異なっていた。ヴァシュティが実際の飛行船に感じた違和感は、諸感覚の相互作用という現象と深い関わりがあると思われる。ヴァシュティは、機械の映像を通して、視覚と聴覚のみによって飛行船という物体を理解していたのであろう。しかし、機械という媒介を通さずに飛行船と直接接した場合、視覚・聴覚の他に、嗅覚による認識が新たに加わることになり、それが違和感を生じさせる原因になったと考えられる。

この飛行船の旅で、ヴァシュティは他の乗客と接することに対しても不快感を抱いている。それは、“People never touched one another. The custom had become obsolete, owing to the Machine.” (120) とある通り、人間同士の肉体的接触もまた、彼女の慣れ親しんでいる社会からは失われているからだ。視覚と聴覚は、モニタの画像やマイクロフォンの音声のように、機械を使って拡張することが出来る。しかし、機械を通して花のにおいを感じることは出来ない。同様に、機械を通じてものの感触を得ることも不可能だ。つまり、嗅覚と触覚は、直接体験でしか得ることの出来ない感覚なのである。機械に

よって環境が整備されるにつれて、人間は物事を視覚・聴覚のみで捉えるようになり、機械を通しては得られない嗅覚や触覚といった感覚は排除される方向に向かっていく。部屋に閉じこもり、機械を媒体として世界中のものと接してきたヴァシュティにとって、直接体験でしか得られない嗅覚・触覚を通しての認識は、馴染みのないものであり、異様に感じられるのであろう。彼女の直接体験への嫌悪は、嗅覚・触覚での認識に対する嫌悪に起因していると考えられる。

ヴァシュティが直接的な体験を恐れるのとは対照的に、クーノは、地球の表面を訪れ、空の星を直接見てみたいと切望し、自ら直接体験を求める。しかし、息子の希望を聞いたヴァシュティは少なからずショックを受けた。危険を冒して人工呼吸器が必要である地球の表面を訪れる事は、彼女にとっては意味のない行為としか思えないからだ。ヴァシュティが“The surface of the earth is only dust and mud, no life remains on it, and you would need a respirator, or the cold of the outer air would kill you. One dies immediately in the outer air.”(112)と言っていることから分かるように、この世界の人間はもはや地上での直接体験に耐え得る肉体を備えていない。人間の非合理的な欲望や行動が認められず、直接体験の機会が忌避される機械世界では、人間は直接体験に必要な体力を失い、五感を使って直接感じることに恐怖や不快感を抱くようになってしまったと考えられる。

クーノはこのような現状を批判し、“Man is the measure”という主張を展開する。

You know that we have lost the sense of space. We say “space is annihilated”, but we have annihilated not space but the sense thereof. We have lost a part of ourselves. I determined to recover it, and I began by walking up and down the platform of the railway outside my room. Up and down, until I was tired, and so did recapture the meaning of “Near” and “Far”. “Near” is a place to which I can get quickly on my feet, not a place to which the train or the air-ship will take me quickly. “Far” is a place to which I cannot get quickly on my

feet; the vomitory is “far”, though I could be there in thirty-eight seconds by summoning the train. Man is the measure. That was my first lesson. Man’s feet are the measure for distance, his hands are the measure for ownership, his body is the measure for all that is lovable and desirable and strong. (125)

クーノは、この世界に住む人間にとっての致命的な喪失は、“the sense of space”の喪失だと指摘している。電車や飛行船の普及によって、人間は短時間で遠隔地へ移動することが可能になった。一見、“space is annihilated”と考えられるこの状況を、クーノは“we have annihilated not space but the sense thereof”と、人間の距離感覚の喪失と捉えている。なぜなら、鉄道や飛行船がいつのまにか距離を測る基準となり、それに伴って人間の距離感覚は狂っていくからだ。彼は、この喪失が、「人間が尺度」でなくなる状態に深い関わりがあると考えている。距離の測定は「人間が尺度」でなければならぬと説くクーノにとって、“Near”と“Far”を識別する重要な基準は、肉体の疲労感である。「人間が尺度」である状態とは、文字通り、人間が自分の肉体と感覚を使って物事を認識することを意味していると考えられる。

クーノが理想として目指す「人間が尺度」の世界とは、機械化が進む以前の世界、人間が人間らしく普通に暮らす世界であり、それは私たちにとっての現実世界そのものである。近代化が行き過ぎた未来世界という架空世界の描写は、我々の日常生活を新たな光で照らし出し、ファンタスティックな理想像として浮上させる。「機械が止まる」におけるファンタジーは、我々の現実そのものが人間らしさを維持することのできる「理想の世界」であると気付かせる役割を果たしていると言えるだろう。

〈4〉

しかし、「人間が尺度」という主張をもとに試みたクーノの反逆は失敗に終わる。クーノは機械世界の束縛を逃れて地上へ飛び出すことには成功するが、結局地上で生き延びることはできない。小さな故障をきっかけに歯車が狂い出した機械社会もまた崩壊し、物語の最後にはクーノの死と共に世界の

破滅が訪れる。この結末には、どのようなメッセージが込められているのだろうか。本節では、当時の社会の状況や『モーリス』における社会の描写も視野に入れつつ、「機械が止まる」から読み取れる作者の人間観や社会観を考察していく。

機械社会の終焉は、次のように描かれている。

Ere silence was completed their hearts were opened, and they knew what had been important on the earth. Man, the flower of all flesh, the noblest of all creatures visible, man who had once made god in his image, and had mirrored his strength on the constellations, beautiful naked man was dying, straggled in the garments that he woven. (145)

崩壊を目前にして、地球上における大切な存在として強調されているものは、“beautiful naked man”であり、肉体そのものの重要性である。物語に描かれる非人間的な機械世界では、肉体の活動と共に、嗅覚や触覚による認識もまた徹底的に排除される方向に向かっており、その結果、外界での直接体験は人間にとって馴染みのない不快で危険な行動とみなされるようになっていく。「機械が止まる」の主題として、人間と自然の断絶という問題はしばしば指摘されてきた (Erlich and Dunn 46; Hillegas 93)。しかしそれだけではなく、自然の中で生きる生物として、距離の感覚や本能的な動作など、人間の身体能力や感覚機能こそ、失われるべきでない人間性の1つとしてフォースターが重視していたこともまた明らかだ。Judith Scherer Herzはこの物語における肉体性というテーマに注目しており、「機械が止まる」に見られる人間の姿の描写、オリオン座が形作る人間の姿 (111) やウェセックスの丘の擬人化 (131) について、人間性を探求するクーノのヴィジョンとの深い関連性を指摘している (Herz 60-61)。また、フォースター自身も、1938年の評論“What I Believe”の中で、“bodies are instruments through which we register and enjoy the world.” (70-71) と述べており、彼が人間の肉体そのものを価値のあるものとみなしていたことが分かる。「人間が尺

度」であるべきだというクーノの言葉は、世界の尺度は人間の肉体であるべきだという主張である。クーノの改革は達成できずに終わってしまうが、彼の存在によって、肉体を動かすこと、視覚・聴覚だけでなく嗅覚・触覚をも含む五感を使って感じることなど、人間の身体が持つ基本的な機能が、人間らしくあるための重要な要素として強調され、“fungus”に例えられているヴァシュティのような姿、つまり頭脳の部分だけが極度に発達した存在の非人間性が明白になってくる。

身体性という問題は、物語の中だけでなく、当時の現実社会においても関心を集めている話題であった。1900年、第二次ボーア戦争（the second Anglo-Boer War）での苦戦を経て、翳りが見え始めた大英帝国の勢力を建て直すためには強靱な肉体を持つ人間を育成する事が不可欠であるという考えが流布し始める⁴。そのような時代背景の中、社会が理想としたのは愛国心に溢れたスポーツマンタイプの男性像であった⁵。しかし、逞しい肉体を理想的な男性性の象徴と捉える現実社会の価値観は、「機械が止まる」では完全に反転し、肉体の頑健さは社会から排除すべき危険分子と見なされている。「機械が止まる」が示唆しているのは、ステレオタイプそのものに対する風刺ではなく、ステレオタイプに固執する社会に対する風刺である。この点においては、同性愛を犯罪として排斥する社会に疑問を投げかけた『モーリス』と共通していると言えるだろう。

『モーリス』の主題は同性愛であるが、「社会とは何か」というより普遍的な問題を追求した小説でもある。無神論の主張を家族や教会の人々に無視されたモーリスが自問する“Did society, while professing to be so moral and sensitive, really mind anything?” (44) という言葉は、この物語のもう1つの主題を表しているとも考えられる。フォースターは完成した『モーリス』をまず3人の親しい友人に見せており、彼らと交わす書簡の中で『モーリス』に関する意見交換を行っている。彼らとの議論は当時の社会に対するフォースターの見解が様々な角度から反映されていて興味深い。例えば、男性同士の肉体描写に抵抗を示す Forrest Ried に対して、フォースターは“The man

in my book [*Maurice*] is, roughly speaking, good, but society nearly destroys him. . . .”と述べ、“[But] blame Society, not Maurice”と社会の理不尽さに注意を喚起している (Moffat 118)。Lytton Strachey もまた『モーリス』に見られる男性同士の性交描写の必要性に疑問を示し、お互いに愛し合うモーリスと Alec が共に森へ逃避するという結末は現実味に欠けると指摘した。フォスターは、性描写についてのストレイチーの意見は認めているが、1年前にはストレイチーに “No one ever breaks conventions in the right place.” と書き送っており、因習を変える主張をするためには、不自然さをも恐れないう強い姿勢が感じられる。フォスターにとって『モーリス』は、たとえいわゆる現実味が失われてしまっても、因習を崩して現実を変えていきたいという自らの理想を表明しようとした作品であり、その点においては「現実味に欠ける」というストレイチーの批判は的外れであったとモファットは論じている (Moffat 119)。『モーリス』におけるフォスターの創意を踏まえた上で「機械が止まる」を再検討してみると、人間社会の不安定さというテーマがより明瞭になってくる。人々の価値観は社会の状況や時代によって変化するものであり、場合によってはヒエラルキーが逆転する可能性もある。従って、人々がそれぞれの価値観に基づいて定める「理想の社会」像もまた同様に曖昧なものである。シーベリーが指摘しているように、生存と種の存続という共通の目標に向かって組織を形成し、労働に励む蜂たちとは違い、それぞれが「理想の社会」という実態のないゴールを目指して忙しなく活動する人間たちは、正体不明の焦燥感を繰り返し感じるばかりなのかもしれない (Seabury 69)。その意味においては、クーノが現状を打破することができても結局生き延びられないという結末は、人生における人間の不毛な闘いの帰結を象徴しているとも言えるだろう。

それならば「機械が止まる」は、「理想の社会」を求める行為の虚しさを描いた物語なのだろうか。物語の結末では機械も人間も破滅してしまうが、最後に提示されるのは救いのない終焉の図だけではない。物語の最後の一文でクローズアップされる対象が廃墟や死体ではなく、「汚れなき空の断片」

(146) であることから伺えるように、「たとえ死ぬことになっても、自分たち自身に戻って生命を回復した」(146) クーノとヴァシュティが、「機械を通さずに触れ合う」(145) 様子は、人間性の回復を予感させる希望の光を放っており、「今日はホームレスだけれど、明日は…」(146) というクーノの言葉には、彼の試みが次世代へと引き継がれていく可能性が仄めかされている⁶。人間らしさを排除した機械世界と人間らしさを取り戻すために戦うクーノ、そして両者の破滅を描いた「機械が止まる」は、「理想の社会」という明確な救いの世界が存在しない現実を暴き出す。しかし同時に、理想を目指して試行錯誤せずにはいられない人間の性は、「人間らしさ」の1つであり、たとえ目覚ましい結果に繋がらなくとも、そうした報われることのない行為の積み重ねこそがよりよい世界への道を徐々に切り開いて行くという希望をも仄めかしている⁷。「機械が止まる」が示唆するのは、本当の理想の社会は、人間らしい日常生活の営みの中に潜んでいるという事実なのではないだろうか。理想の探求という問題は、後の『ハワーズ・エンド』のテーマとなり、現実社会の枠組みの中でより深く追求されていくことになる。

〈結び〉

フォースターが「機械が止まる」で描くファンタジー世界の役割は、主人公を現実社会の柵から解放する神秘の世界を描き出していた初期の幻想的な短編小説とは異なっている。なぜなら「機械が止まる」におけるファンタジーは、様々な制約に縛られている現実と解放をもたらす幻想世界という関係を反転させることにより、読者自身の日常世界を憧れるべきファンタジー世界として提示し、束縛／解放、日常／非日常、現実／理想という二項対立がいかにも曖昧であることを示唆しているからだ。さらに、利便性という観点から理想を追求した機械社会の閉塞と崩壊を描き出すことによって、何の束縛もない理想的なファンタジー世界というものが結局は実体を持たない桃源郷にすぎないことも露呈する。しかし、その先に見える結論は、救いは存在しないという否定的なものではない。人間が肉体と感覚を正常に保ち、人間ら

しく暮らしていく日常の積み重ねこそが、実は人間にとって最も理想的な環境だと訴えているのではないだろうか。結局本当の「理想の世界」とは我々の日常であり、それは我々の現実の中に存在している。「ただ結びつけよ」をモットーに据えて理想のコミュニティーを追求する『ハワーズ・エンド』や同性愛を罪と定める社会的、宗教的価値観に疑問を投げかける『モーリス』が後に続くことを思えば、「機械が止まる」は作者が現実の社会と真摯に向き合い、その可能性を追求し始めた転機を示す作品とも言える。

1903年に発表された“Albergo Empedocle”から1920年に発表された“The Story of the Siren”に至るまで、フォースターの12編の短編小説は、まず *The Celestial Omnibus* (1911) と *The Eternal Moment* (1928) という2つの短編集にまとめられた。1909年に発表された「機械が止まる」は、これらの短編小説群のちょうど真ん中に位置し、後者の『永遠の瞬間』に収録されている。収録作品は主に年代順に振り分けられているが、Alan Wilde が指摘しているように、フォースターはそれぞれの短編集の“tone” (63) にこだわり、1905年にすでに発表されていた“The Eternal Moment”を取って『天国行きの乗合馬車』には収録しなかった⁸。同様に、フォースターが1909年に発表された“Other Kingdom”を『天国行きの乗合馬車』に収録しているにもかかわらず、同年発表の「機械が止まる」は『永遠の瞬間』に収めているという事実は興味深い。フォースターのファンタジーを「社会的制約のために公にできない思想を表現するための隠れた政略 (the covert politics)」と考える Ambreen Hai は、前者の短編集『天国行きの乗合馬車』を、フォースターにとってファンタジーとの「決別」を示す記念碑的事業と捉えている。第一次世界大戦以降、フォースターの作品は主に政治的関心をダイレクトに表明した作品と、プライベートに楽しむホモエロティックな小説とに分割され、それに伴って「隠れた戦略」であった「ファンタジー」は彼にとって必要なくなったのではないかと彼女は論じている (Hai 240)。しかし、『天国行きの乗合馬車』が出版された1911年と近い時期に執筆されている「機械が止まる」、また『ハワーズ・エンド』や『モーリス』だけでなく、大戦前後にわたって

執筆が続けられ、大戦後に完成した *A Passage to India* (1924) についても、「ファンタジー」という観点から再検討してみると、『天国行きの乗合馬車』に収録されている作品に見られたフォースターの「ファンタジー的要素」が違った形で以後の作品へ受け継がれていくように思われる。というのも、私たちが日々目にしていく現実とは異質の空想世界を見せるためではなく、そうした現実そのものの姿をより明確にし、そこに秘められた無限の可能性を探り出すために、ファンタジー的要素が巧みに利用されているからだ。ファンタジー的要素の引き継ぎという観点において、「機械が止まる」は後の長編小説『ハワーズ・エンド』と『インドへの道』への繋ぎとなり、重要な役割を果たしていると言えるだろう。「機械が止まる」が敢えて1928年出版の第2の短編集『永遠の瞬間』に収録されたことは、この作品が執筆された1908年頃から新しい「ファンタジー的要素」の模索が始まり、その模索が『インドへの道』で結実する新たなファンタジー世界の構築へと繋がったことを意味しているのではないだろうか。「機械が止まる」はフォースターのファンタジー放棄ではなく、新しいファンタジーへの方向転換を示しているという点でターニング・ポイントを示す作品だと言えるだろう。

注

- 1 Samuel Hynes は、著書 *The Edwardian Turn of Mind* の中で、ヴィクトリア朝を “a triumphant Age of Science” と定義し、その後続く世紀末を “the fading of the scientific dream” と表現している (Hynes 132-133)。
- 2 *Notebook Journal* 27 January 1908. Nicola Beauman の *E. M. Forster: A Biography* より引用。ポーアマンはフォースターのこの記述を引用し、「機械が止まる」との関連性について言及している (Beauman 214)。
- 3 この経緯に関しては、Wendy Moffat が *E. M. Forster: A New Life* の中でフォースターの日記を引用しながら詳細に解説している (Moffat 98-99)。
- 4 ポーア戦争によって明らかになったイギリス人兵士の身体的虚弱さは、帝国維持に対する危機感を抱かせ、改善策の必要性が叫ばれるようになった。Arnold White の *Efficiency and Empire* (1901) はその代表的なものである。詳しい経緯については、Ina Zweiniger-Bargielowska の *Managing the Body: Beauty, Health, and Fitness in Britain, 1880-1939* (2010) を参照。
- 5 Joseph Bristow は著書 *Effeminate England* の中で、「帝国主義的男性性」に対する

- フォースターの複雑な感情について議論を展開している。フォースターの小説にはこうしたステレオタイプの男性性に対する反発が示されている一方で、その肉体的な逞しさに惹きつけられている様子も読み取ることができ、作者の相反する感情は、アスリートタイプの男性とアーティストタイプの男性を何らかの形で結びつけようとするストーリーに表明されていると論じている (Bristow 56-57)。
- 6 ここに『ハワーズ・エンド』の Leonard Bast との共通点が浮かび上がってくる。教養の世界に憧れるレナードは、現実からの逃避場所として「ロマンス・コーナー」という理想の世界を作り出す、結局彼はそこから救いを得ることができず、唐突な死によって不幸なまま物語から姿を消してしまう。しかし彼の存在は、その後思いがけない形で、主人公 Margaret が “Only connect. . .” という理想のもとに試みる新しいコミュニティーの形成に貢献することになる。
- 7 シーベリーは、「この機械社会の中でクーンだけが他の人々と違う理由が明らかでない」という Charles Elkins のコメントに言及し、理由が示されていないところにこそフォースターの主張があるのではないかと指摘している。それは、画一的に統制された世界においては必ず異端児が出現するという人の世の常を示すものであり、その点において「機械が止まる」はハクスリーの『すばらしい新世界』に見られるディストピアよりも楽観的であると論じている (シーベリー 70)。
- 8 フォースターの短編小説の初出年代と、2つの短編小説集の特徴については Alan Wilde の *Art and Order: A Study of E. M. Forster* (1964) を参照。ワイルドは、『天国行きの乗合馬車』は初期のイタリア小説と、『永遠の瞬間』は『ハワーズ・エンド』や『インドへの道』と同調する雰囲気を持つと指摘している (Wilde 63-64)。

Works Cited

- Beauchamp, Gorman. “Technology in the Dystopian Novel.” *Modern Fiction Studies*, vol. 32, no. 1, Spring 1986, pp. 53-63.
- Beuman, Nicola. *Morgan: A Biography of E. M. Forster*. Hodder and Stoughton, 1993.
- Bristow, Joseph. *Effeminate England: Homoerotic Writing after 1885*. Open UP, 1995.
- Dunn, Thomas P., and Richard D. Erlich. “A Vision of Dystopia: Beehives and Mechanization.” *The Journal of General Education*, vol. 33, 1981, pp. 45-57.
- Elkins, Charles. “E. M. Forster’s ‘The Machine Stops’: Liberal-Humanist Hostility to Technology.” *Clockwork Worlds: Mechanized Environments in SF*, edited by Richard D. Erlich and Thomas P. Dunn. Greenwood Press, 1983, pp. 4-61.
- Forster, E. M. *Howards End*. Norton, 1998.
- . “The Machine Stops.” *Collected Short Stories*. Penguin, 2002, pp. 109-146.
- . *Maurice*. Penguin, 2005.
- . “The Story of a Panic.” *Collected Short Stories*. Penguin, 2002, pp. 9-33.
- . “What I Believe.” *Two Cheers for Democracy*. Harcourt, 1951, pp. 65-74.
- Hai, Ambreen. “Forster and the Fantastic: The Covert Politics of *The Celestial Omnibus*.” *Twentieth Century Literature*, vol. 54, no. 2, Summer 2008, pp. 217-246.
- Herz, Judith Scherer. *The Short Narratives of E. M. Forster*. Macmillan, 1988.

- Hillegas, Mark E. *The Future as Nightmare: H. G. Wells and the Anti-Utopians*. Oxford UP, 1967.
- Hynes, Samuel. *The Edwardian Turn of Mind*. Princeton UP, 1968.
- Lewis, Arthur O. "Introduction." *Clockwork Worlds: Mechanized Environments in SF*, edited by Richard D. Erlich and Thomas P. Dunn. Greenwood Press, 1983, pp. 3–18.
- Langer, Susanne K. "Man and Animal: The City and the Hive." *Philosophical Sketches*. Johns Hopkins UP, 1962. pp. 108–22.
- Moffat, Wendy. *E. M. Forster: A New Life*. Bloomsbury Publishing Plc, 2011.
- Pordzik, Ralph. "Closet Fantasies and the Future of Desire in E. M. Forster's 'The Machine Stops.'" *English Literature in Transition*, vol. 53, no.1, 2010, pp. 54–74.
- Seabury, Marcia Bundy. "Image of a Networked Society: E. M. Forster's 'The Machine Stops.'" *Studies in Short Fiction*, vol. 34, no.1, Winter 1997, pp. 61–71.
- Sultzbach, Kelly Elizabeth. *Embodied Modernism: The Flesh of the World in E. M. Forster, Virginia Woolf, and W. H. Auden*. University of Oregon, 2008.
- Thomson, George H. *The Fiction of E. M. Forster*. Wayne State UP, 1967.
- Trilling, Lionel. *E. M. Forster*. New Directions, 1943. (中野康司訳『E. M. フォースター』みすず書房, 1997.)
- Wilde, Alan. *Art and Order: A Study of E. M. Forster*. New York UP, 1964.
- Zweiniger-Bargielowska, Ina. *Managing the Body: Beauty, Health, and Fitness in Britain, 1880–1939*. Oxford UP, 2010.

